

入試のエッセンス

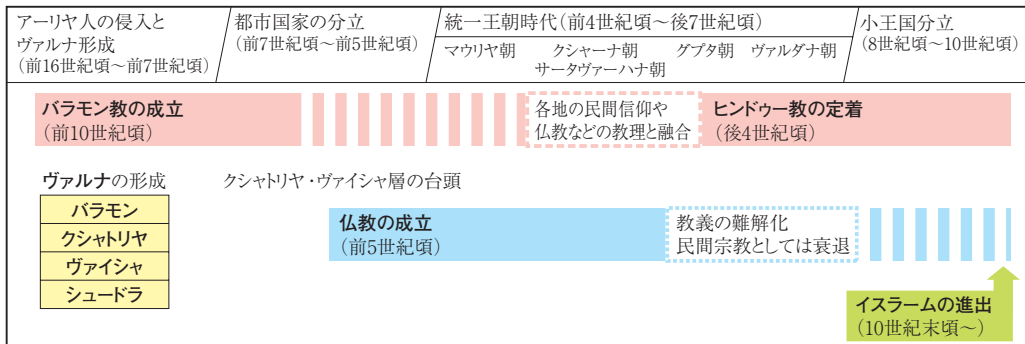
1 古代インドの宗教について考える

📍のつけどころ

古代インドにおける諸宗教の展開に注目！

古代インドを学ぶ上で、宗教の展開についての理解は欠かせない。なかでも、現代世界においても多くの人々から信仰されているヒンドゥー教と仏教の動向は非常に重要である。教義の特徴だけでなく、盛衰の過程やインド社会との関わりについても整理しよう。

古代インドの宗教



☑️チェック

- ☑️ 前1000年頃、アーリヤ人はガンジス川流域に進出し、牧畜社会から農耕社会へと移行していった。この過程で社会の階層化が進行し、祭儀を司る①_____を頂点とする4つの身分階層から成る②_____が形成された。
- ☑️ 前6世紀頃にはガンジス川中流域に多くの都市国家が発展し、国家間の抗争や交流の中で、新しい思想が成立した。③_____が開いた仏教や、④_____によって開かれ不殺生の戒律を説く⑤_____教がその代表例である。②_____を否定するこれらの宗教は、都市の発展とともに台頭したクシャトリア・ヴァイシャ層の支持を受けて信徒を増やしていった。
- ☑️ 仏教はマウリヤ朝の⑥_____王、クシャーナ朝の⑦_____王などインドの諸王朝の支配者による保護を受け、グプタ朝期に建てられた⑧_____は仏教教学研究の中心となった。しかし、教義の難解化とともに次第に民衆から乖離していった。
- ☑️ 紀元前後以降、バラモン教に民間信仰や仏教の教理が融合し、⑨_____神やヴィシュヌ神への信仰を説くヒンドゥー教が成立した。②_____ごとの生活規範を定めた『⑩_____』を通じて、グプタ朝期にはヒンドゥー教は日常生活の細部にまで浸透・定着していった。

⚠️ イスラーム勢力の進出後も、ヒンドゥー教はインド社会に深く浸透し、勢力を維持した。インドにおけるイスラーム教とヒンドゥー教の関係は、その後のインド史の重要なポイントとなる。

空欄の解答

- ① バラモン ② ヴァルナ ③ ガウタマ=シッダールタ
④ ヴァルダマーナ ⑤ ジャイナ ⑥ アショーカ ⑦ カニシカ
⑧ ナーランダー僧院 ⑨ シヴァ ⑩ マヌ法典

5 秦・漢の対外政策について考える

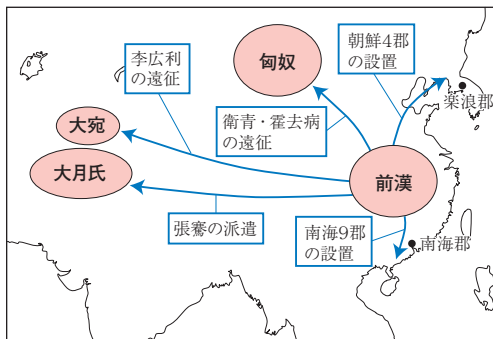
📍のつけどころ

中国と周辺諸民族との関係に注目！

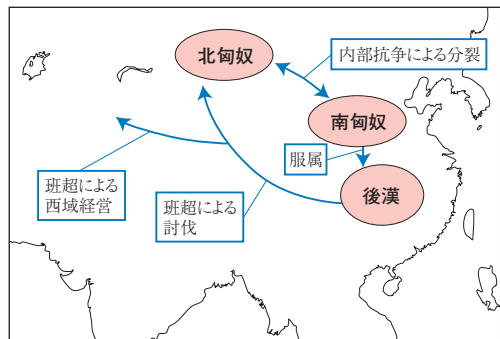
秦・漢帝国は国内における中央集権体制を確立する一方で、周辺諸民族との交流や対外進出も行った。とくに北方の遊牧民族との関係は、その後の中国史を理解する上でも重要なポイントである。対外進出が国内政治に与えた影響も踏まえつつ、秦・前漢・後漢それぞれの対外政策における特徴的な事項を整理しよう。

前漢と後漢の対外関係

▼前漢の対外関係



▼後漢の対外関係



☑️チェック

- ☑️ 秦の始皇帝は北方で強大な遊牧国家を築いていた①_____に対抗するために②_____を修築し、南方では華南を征服して南海郡など3郡を置いた。遠征の負担は秦の支配への反発を招き、始皇帝の死後は各地で反乱が頻発した。
- ☑️ 前漢は建国当初は①_____に対して和親策を採っていたが、第7代武帝の時代に反撃に転じてこれを撃退し、領土を拡大した。さらに③_____と同盟して①_____を挟撃するために④_____を派遣したことを契機に西域への進出を強め、タリム盆地のオアシス諸都市まで支配を拡大し、敦煌郡など4郡を設置した。東北では⑤_____朝鮮を滅ぼし、南方では⑥_____を滅ぼすなど積極的な対外政策を展開した。
- ☑️ 積極的な対外政策により前漢が財政難に陥ると、武帝は物資の流通や物価を統制する⑦_____法や平準法を制定し、⑧_____の専売を実施した。
- ☑️ 後漢は建国当初は国内の秩序回復に注力し、対外的には消極策を採っていたが、やがて積極策に転じていった。後1世紀末に和帝から⑨_____に任ぜられた⑩_____は、西域経営に活躍してタリム盆地周辺の多くのオアシス諸都市を支配下に置いた。
- ☑️ 秦・漢時代には西方にまで中華帝国の存在が広く知られるようになった。2世紀にはローマ皇帝マルクス=アウレリウス=アントニヌス帝のこととされる“⑪_____”の使者が現ベトナム中部の日南郡を訪れたといわれる。

空欄の解答

- ① 匈奴 ② 長城 ③ 大月氏 ④ 張騫 ⑤ 衛氏 ⑥ 南越
 ⑦ 均輸 ⑧ 塩・鉄・酒 ⑨ 西域都護 ⑩ 班超 ⑪ 大秦王安敦